

町史編さん室だより



令和9年度の安平町史発刊にあたり、町史編さん作業の進捗状況などをお知らせします。

問合せ 総務課町史編さん室 ☎ 2511

分村問題については、これまで何度かお伝えをしてきましたが、全日制高等学校の設置問題をきっかけに、開村以来くすぶり続けてきた両者間のあつれきが再燃し、公聴会、村議会、道議会を経て安平村は二つの村に分かれることとなりました。

今回は、これらの分村事情を詳しくご紹介します。

第八回

分村事情

追分分村事情



昭和二十四年九月に安平村開村五〇年記念式典が挙行されてから三年後の昭和二十七年八月一日、長い歴史と伝統をもつ安平村は、ついに安平村と追分村という二つの村に分割されることとなった。

そもそも分村問題が起こった経緯は、明治三十三年の安平村開村当時における戸長役場設置位置問題が発端であり、追分側と早来側の対立以来、分村は宿命的なものとして時期の問題とされてきた。

このようなか、戦後の混乱期から落ち着きを取り戻してきた昭和二十七年の春から、追分高等学校の全日制課程設置を巡って、分村問題が再燃した。

この頃の両地区の実態をみると、戸数と人口はほぼ同じであるが、早来地区は総戸数の約半数が農業者で、生産地帯としての特色を持っているのに対し、追分地区は鉄道従業員が総戸数の過半を占める消費地帯としての特色を持っている。

このため、両地区住民の物の観点が相違することは当然のことであって、過去数十年間にわたる両者の対立の原因もここにあり、またこれが分村問題の起こった根本的原因の一つでもあった。

追分高等学校設置問題

昭和二十四年に定時制高校として苫小牧高等学校追分分校が設置され、昭和二十六年には定時制追分高等学校として独立したが、その後、追分地区住民を中心に全日制高校設置の機運が盛り上がってきた。同年十二月二十六日の定例村議会で、「追分高等学校（全日制）設置について」が議案として提出され、これを高等学校設置特別委員会に付託。同特別委員会で「高校設置は不可能にあらざ」との結論が出されたが、翌二十七年一月三十日の臨時村議会で、高校設置に賛成する追分側議員と、時期尚早とする早来側議員との間に活発な意見の応酬があり、採決の結果、賛成一一人（追分側議員全員）、反対二二人（早来側議員全員、うち二人欠席）の僅差で議案が否決された。

分村活動の活発化

追分高等学校の全日制設置が議会で否決されたことで追分側議員の態度は硬化、分村してでも全日制高校を設置しようという方向へ積極的に動き始めた。

この頃から分村問題が次第に論議され、磯部村長も両地域の発展のためには、分村もやむなしと決

公聴会の開催と最終議決

意し、昭和二十七年三月三日の村議会議員協議会では「村民の幸福のためには分村も致しかたない」という意見が大半を占め、大多数の議員が分村に賛成した。

昭和二十七年六月六日、定例村議会に「安平村の一部を分けて追分村設置の申請について」が議案として上程され、分村問題特別委員会を設置して審議を付託し、同特別委員会では公聴会を開き、意見を徴することを議決した。同年六月九日に開催された公聴会には二七人の公述人が出席し、賛否の意見が出され、公聴会閉会後の同特別委員会では、村民の意見が賛成多数という結論から「分村可なり」と決定。引き続き再開された定例村議会の最終的な議決によって分村は決定的となった。

分村による追分村の設置

分村については、村民の意思に反して議会で一方的に決めたものであり納得できないとして、村内の各農業団体が反対する一幕もあったが、六月二十六日の道議会本会議にて「安平村を分村して追分村を設置する」ことが議決された。

公聴会における公述人の主な意見

賛成	反対
<ul style="list-style-type: none"> ・生産地帯と消費地帯の伯仲した二大勢力の対立が続き、避けられない事情にあるために村の発展を阻害している。 ・相異なる観点に立つ者の対立を続けるより、小さくても団結して一致した村の施策を進め得るようにするべきである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・窮乏している村財政下、分村により無駄な経費がかかり村民の負担が過重になる。 ・現在実施中の振興計画が分村により一頓挫を来すことになる。 ・農家は母村と分村に大差がででき、少ない方の農家は冷遇されるおそれがある。

明治三十三年六月一日に安平村が開村して以来五十有余年、地域的な種々の問題から早来側と追分側という二大勢力の確執からその対立が続き、管内屈指の難村として歴代戸長、村長の村政上に暗影を投げかけながら、これを宿命的なものとして、早晚分村という事態は避けられないものとしてきた安平村は、完全に二つの村に分かれ、追分村の独立開村により、役場を地元を持ちたいという追分地区住民の多年の悲願が実現することとなった。